桂園竹譜

三

特
二奴14
583
3

早稲田大學圖書

桂園竹譜巻之三

むらさき竹　胡麻竹

むらさき竹ハ今いふ紫竹にして即和漢通名なるその一名を紫君一名紫苕一名観音竹といふ此種ハしめ篠を解く時ハみな青く漸くにして紫に変するものあり筍出て即紫なるもあり（竹譜詳録 江陵縣志）また一年ハ青くして二年に至て紫に変し（新安事物紺珠）或ハ二年にして色を変し三年にして紫なるもあり（益部方物略記）今あるものハその幹濃紫にして高さ八九尺径四五分まて雙枝のもの多く獨枝のものすくなし葉ハ細小にして大抵淡竹のことくし李

ニ14
583
3

息齋竹譜に紫竹今所々にあるハ笙のことく淡竹の如く
苦竹の如しといへる中に淡竹の如しといへるハ即ち
ことに同種なれバ然しいふめる淡竹ハ毎枝細小にして
節ニなきによきものなれ紫竹の枝もまたこれに同し
く節に作る也し然るに苦竹笙竹のごとしといへるも
のハ和産つまた詳ならねバまゝ俗に胡麻竹といへるハ
紫黒色の斑点あれて別種のやうにみゆれどもその実
ハ紫竹の年を経て再び色を変せしなり今角田川木母
寺のうしろあたりに榎木戸また河口辺此竹殊に多し杈
京都将軍家のころハ紫竹もて作れる鞭を平人ハ止た

りき 弓馬故実 いつれ西土よりしも馬箠に用ふるよし 竹譜詳録 又
この竹と傘柄その外杖なとにも用ふること西土もまたしも
ある事なれバ一種舶来のものありその高さ大抵七八尺
根上より四五節の間ハ双枝にして其より以上ハ三
枝なれどその三枝の状左右の枝ハ大にして中枝ハ至て
細し枝その色ハ上節より漆出して下節のかたに至る
節また紫色にして枝にも紫斑あれ葉ハ前條よりも細
小にて二葉三葉と一朶にし葉本に細褐色あれ此種ハ
今白河侯大塚の下邸にあれ凡笙竹ハ淡竹よりもその
葉やゝ細小なるものなれバ竹譜に紫竹笙竹の如しと

いへるハ蓋しこれをさしていひしなるへし又越後國
の方言にさかさ竹といふものあり即其國七不思議の
一ツなりこれハ親鸞上人の紫竹の杖をさしおかれし
に根つきて遂に竹林となりしと（和漢三才図会）いへり西土にも
また越州蕭山縣の東に黄竹山ありその上に黄竹多し
これハ范蠡の發を残しおきしにおのつから筍を生して林
となりしと（竹譜詳録）いへるも同日の談なり

大和本草云（和品）紫竹色紫黒淡濃紫白相雜レリ

和漢三才図会云紫竹本朝亦有數種云〻　紫竹篠竹多有
之

又云紫竹林在蒲原郡弥彦庄島座野（東派西方支配之）親鸞上人
三年居住弘法之地也而未皈伏者衆於是以所携紫竹節、
揷曰、我所勸念佛宗、愜佛意、則此竹當活生、果不日繁茂而
枝葉猶倒生、人無不感信、其竹林（南北三十五間東西二十間）今亦存在
焉

本草綱目啓蒙云紫竹ハ即苦竹ノ品類ナリ生シタル年
ハ緑色ナリ翌年ヨリ変シテ紫黒色トナル蘇頌ノ說ニ
苦竹ニ有白有紫ト云丹鉛録ニ又有苦竹黄苦青苦白苦
紫苦ト云是ナリ

益部方物畧記云紫竹蜀諸山中尤多園池亦種為玩、然生

二年色乃変三年而紫
竹譜詳録云紫竹出江浙两淮今處々有之如筀竹淡竹苦
竹或大或小但色有浅深通名紫竹有初緑而漸紫者有筍
出即紫者世共謂之紫竹用之鞭柄拄杖甚佳亦有製簫笛
者根亦紫色節々匀停於馬箠尤宜新安志云紫竹斫之益
繁、誌云一年青二年紫三年不斫四年死
續竹譜云紫竹其莖如漆出青城峨眉山可作笙竽簫管
遵生八牋云紫竹杭產色紫黒可作笙簫笛管諸用俱可故
雅尚者多畜之
本草綱目云紫者黯色黝然

致富全書云紫竹高可丈餘大僅手握相傳紹興中有商泛
海阻風上下見一僧背後有竹斬之作杖隨刃有光倏忽即
是落山觀音座後旃檀林紫竹又名觀音竹可作簫笛
通雅云紫竹斑竹皆有大者又有極小如瀟湘竹者廣四四
仙廻深山有之
秘傳花鏡云紫竹出南海普陀山其幹細而色深紫之可為
簫管今浙中皆有
華夷花木考云紫竹小而色紫宜傘柄簫笛用
江陰縣志云紫竹初解籜猶青久之色乃変
陽春縣志云紫竹莖細節密不甚高深紫色植之庭際可称

雅玩、堪当杖、亦可製簫、聲極清亮

高安縣志云、紫竹稍類斑竹、而通身紫色、質堅重堪作器

番禺縣志云、紫竹幹如指紫色、長不滿五六尺

當塗縣志云、紫竹質堅厚於斑竹、

建昌縣志云、紫竹生本土者、幹小而脆、惟紫黑色可供觀美
堪用者少

仁和縣志云、紫竹小而色紫、可為簫管、其細者宜筆

會稽縣志云、紫竹可為簫管、九節者佳

郡部府志云、紫竹与斑竹相類、但其色純紫、可作傘柄亦可
作簫笛

紹興府志云、紫竹可為簫管九節者佳

江西通志云紫竹小而勁直色紫可脩簫管九節者佳、笋味亦美

釋名

むらさき竹 家隆卿百首 逍遥院家集

胡麻竹 俗称

此竹紫黒斑点極めて細小にして頗る胡麻の如し故に名つく

紫竹 益部方物記、竹譜詳録、本草綱目 致富全書、華夷花木考

紫君 庶物類纂引、張文潜賛

紫苦 丹鉛録

觀音竹 事言要玄集 致富全書

正誤

塩嚢抄云世ニ紫竹ヲ忌ハ堯ノ女娥皇女英崩御ノ後湘浦ノ南蒼梧野ニ納奉リケレハ二人ノ妃常ニ行湘浦ノ岸ニ立テ泣給ヘル涙竹ニ懸リテ斑ラニ染リケル也後ニ生出タルモ湘浦ノ竹ハ皆斑ラナリトイヘリ此竹メツラシキ故ニ移シ植テ世ニ弘マレル也昔ナキ人ヲ戀ヒ涙染リシ故ニ此竹ヲ忌ナリ今紫竹斑竹ト二ツニイハ共同類ナルヘシ

按に紹武府志に紫竹与斑竹相類すといひ高要縣志にも紫竹梢類斑竹而通身紫色なるといへることをもてその実ハ別種なり且紫竹ハ娥皇女英の涙かゝりし竹にもあらざれハ斑竹ハ忌こともあれ紫竹ハ忌へからずその二女の涙かゝりしといふもとより西土の妄なる俗説にして斑竹の斑文あるもまた紫竹の紫色なるも皆其竹の天稟なりけれハ涙かゝりし故に斑文の出来しといふも同類のものなれハともに忌といふも共に拘ものなり今の俗説に紫ハ色のうつろひやすきをのがれて婚姻の衣服なるにハ其色を用ゐさるなるへし

婦らくよりは紫竹を忌もしくハこのたくひにふれても
あら無きにや

廣大和本草云紫竹云〻大和本草ニ被ニナミト云ハ非
也

案に大和本草紫竹條の標注に和名の二字ありて被
なかしこといふ文ハ見えん然るを直海龍の漫に其の
文をつくろひて強て篤信をとかめたるのみ

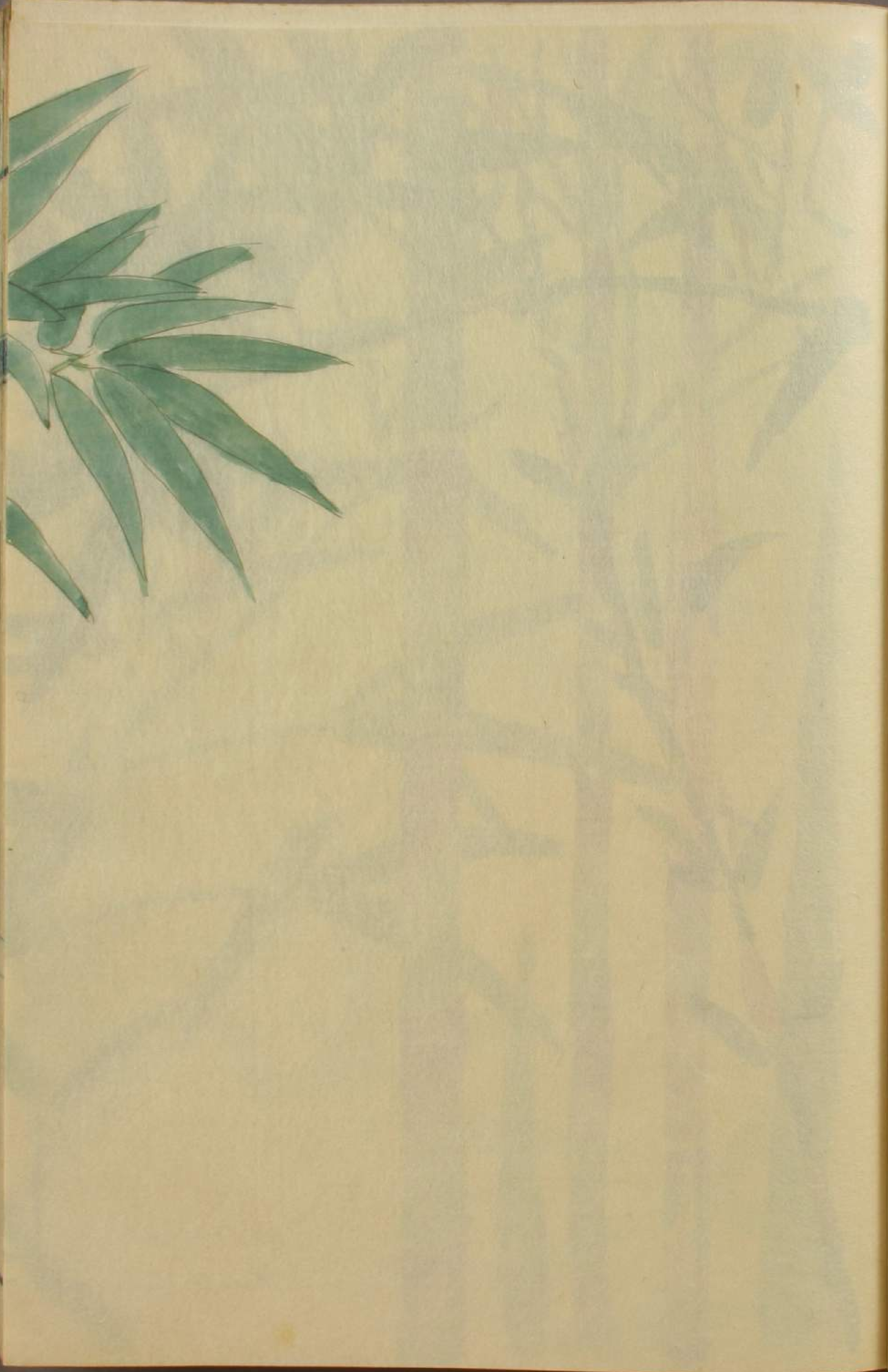
寒竹　孟宗竹

寒竹一名孟宗竹ハ漢名をまた紫竹といふその性叢を
成して數十百幹に至る故に人家多く分ち植て籬落に

も此竹徑ハ三四分にして高さハ八九尺或ハ一丈許節極
めて繁し中幹よりは以上ハ大畧一尺の間五節にして其
れよりは以下ハ四節なりは凡諸竹ハ上節高く起りて下節
ハ低く上下相合して一節となるハ其の常なれとも此
本幹ハ上節ありともいへとも至て低く籜を生する下節
のミありの如く又枝節に至りてハ其れと相反して上
節却て高く起り下節ハさらにあるきこのことくしその籜細
斑紋ありて頗る紫竹の籜の斑文に似たり叔此枝ハ根
上より十三四節以上まてはしめて双枝を生するここ
九二節まてそれよりは以上ハ毎節をへて三枝なり凡竹

の三枝なるハ左右両枝ハ長大にして中枝ハ却て細小
なるもあれども此枝ハそれと相反して中枝ハ長く
左右の枝ハ短し其中枝の長きこといへども僅に一尺許
にすぎず其枝にハ十二三節ありて毎節各両三をわ
かち長さ三四寸廣さ四分許の細小葉を攅簇しいとみ
る其の枝を生せざる根上十三四節にハ並べて小黄牙
ありて此牙年をふるときハおのれと抽出ておのく
三枝を生ずそのころにハ彼の二節の双枝なりとも別に
一小筍を生して一枝を添るなり凡竹類多しといへども
此竹より短枝密節繁葉なるハなくまた本幹細小な

る数を以て其梢杪に至てハ枝葉下垂せざること業平竹
のごとし故大和本草に寒竹冬筍を生ずといへども今
江都にあるものハ此筍秋より生して冬に至れを生長
母竹よりも高し蓋風土の異なるによるなるべし其筍
の状も竹よりも甚だ細小なれどもしかれども味甚美殊
に食ふに堪たり
大和本草云寒竹冬筍生ス又孟宗竹ト云色黒ク細シ
本草一家言云有雪竹、和名寒竹又名孟宗竹冬時抽筍皮
斑似蘐甚竹
増補地錦抄云寒竹ハ色黒クかたき竹なり冬の中に竹



の子出る故寒竹と云 又漢竹ハこゝにハなきものにや平
經盛沙金百両を宋朝へ渡し取寄せて笛に作りけると
て今いふ寒竹ハこれまていなし寒の中に筍を生ずる
故又孟宗竹ともいふ
本草綱目啓蒙云カンチクハ紫竹ナリ人家ニ栽テ籬ト
ス小竹ナリ高サ五六尺甚繁茂ス其成熟ノモノハ黒色
斑ヲナス大ナルモノハ傘柄ニ用ウ
揚州府志云紫竹人家庭心多芭叢而生中実其色深紫可
愛

釋名

寒竹 庶物類纂、大和本草、本草一家言、増補地錦抄、本草綱目啓蒙

孟宗竹 仝上

以上名義上文にみえたり又まゝ鳳尾竹の一名を孟宗竹といふ即同名異物なり

紫竹 揚州府志

正誤

廣大和本草云江南竹和名カンチク汀州府志云江南竹寒中生筍名曰雪竹即チ此竹也然ルニ寒竹ヲ和名トスルハ誤ナリ

本草一家言云、有雪竹俗名寒竹云云

紫ニ寒竹ハ即紫竹なる然るを此二誤て雪竹となせり
ハ誤まれり竹譜詳録ニ雪竹生江西、枝葉似筀竹、而稀疎
毎節長二尺許、其籜比江蘆差堅厚、筍色純白、故名、或云
孟宗冬月哭而生筍者即此竹也、張渇之譜云、出清源ゝ
深冬生筍冒雪、一云即江南竹筍之早出者と見えたり
これにてかの誤なること明らかなり又云江南竹江浙
閩廣間皆有之、大概与淡竹相同、但一面出三小枝、葉頗
繁盛、安南生者枝葉大、筍亦可食と見えたれバ雪
竹ハ江南竹を以て一物となせしも亦誤まれり

くろちく

くろ竹ハ漢名を黒竹一名烏竹といふ即和漢通名なり
また一名を鶯竹或ハ烏歩竹ともいふ此竹小野蘭山ハ
播磨にありと（本草綱目啓蒙）いひ谷川士清ハ薩摩にありと（和訓
栞）いひ佐藤成裕云薩摩の産ハその竹雄竹に似て幹極
めて紫黒色なりとこの種播磨に産するもの同種な
るや否をしらず今白河侯大塚の下邸にあるものハ高
さ凡そ七八尺枝葉並ひに紫竹に似てその色紫竹より
まさりて極めて黒し此種ハ即漢産のよし一種観音竹あり
また黒竹と名つくその幹細小にして長二丈八九尺状
古藤の如し（瀛涯勝覧 羣芳詳注）またこ一種烏竹ありて筍を出さ

時としの色黒し（竹譜詳録）また紫竹一名黒竹あり（芳亭客話）といふ又
和産これあることをきかず
本草綱目啓蒙云 烏竹ハ黒竹ナリ 本草彙言ニ 黒竹長二
尺許 如指大 紫黒色 葉亦碧 出西山ト云 南雲通志ニ 黒竹
色黒 可為簫管ト云 和産稀ニアリ
竹譜詳録云 篤竹一 如篠竹 但色正黒耳
本草綱目云 烏竹黒而害母
廣群芳譜引雲南通志云 黒竹出懷寧 色黒可為簫管 葉比
與原譜黒竹異
案ニ原譜黒竹ハ蓋シ観音竹をいふなるべし

漳州府志云 烏竹其色如漆
寧波府志云 烏竹其笋最佳
邵武府志云 烏斑竹大如斑竹 笋極佳
瀛涯勝覧云 観音竹如藤 長丈八尺許 色如黒鐵 每寸約二
三節
彙苑詳註云 観音竹出占城 如藤 長丈八尺許 色黒如鐵 每
節二三寸
湧幢小品云 黒竹如藤 長丈八尺 色黒如鐵 每節長二三寸
名観音竹 産占城國
竹譜詳録云 烏竹生慶元等山中 大者五七寸 圓形 状與龍

禎竹大同俎筍出時烏紫色日乾致遠味珍、他筍不可及也

茅亭客話云、有紫竹葉細而青、莖瘦而紫亦謂之黒竹

釋名

くろ竹 俗称

黒竹 雲南通志

烏竹 潮州府志、寧波府志、

觀音竹 瀛海勝覽、羣芳譜注

紫竹 茅亭客話

正誤

庶物類纂云黒竹一名觀音竹一名紫竹

東藪竹譜所載烏竹之図

案に観音竹ハ長一丈許にして其色黒きもの故に一名
黒竹といひ其竹占城國より産するを以て占城観音竹
ともいへり又茅亭客話に有籌竹云々亦謂之黒竹
といへるハ即同名異物にて籌竹ハ必ず観音竹にハ
あらに知るを混して一物となせるハ誤まれり
本草綱目啓蒙云烏ハ黒竹ナリ本草彙言ニ黒竹長二尺
許従黒色出西山
案本草彙言にハ西山の下に見文徴明太史墨竹銘又
蘄水縣鳳棲山下有墨色小竹俗云王羲之洗筆池崖畔
出也の三十四あまこれによれバ彙言にいふ所の墨

竹ハもと黒竹の誤り西山に出るものと鳳棲山下に出るものと其大さハ大抵おなしものなりしかれを以て綱目烏竹に混同せしハ誤なりまた庶物類纂に墨竹一名観音竹の條に本草彙言を引しハ高僅に二尺許のものと長一丈七八尺のものとを混同せりこれも彙言の黒竹ハ墨竹のあやまりなることを知らさるあやまりなり

玳琄竹　紫篛竹

玳琄竹ハ漢名を紫篛竹といふ其高さ二尺許葉ハ熊笹に似て細小にして長八九寸廣さ一寸餘其葉おゝよそ七八葉を以て一朶とす或ハ五葉六葉のものハ必ず下葉の枯落せしにて全形にハあらす其葉面また熊笹のごとく正中に淡黄色なる一縦道ありてその左右おの〳〵八線路相並ひて葉本より葉先にいたる此竹小なるといへとも其節間獨枝を生し及ひ籜おちさることまた熊笹のことし　但毎節下紫黒色なるを異なりとす此竹今白河侯大塚の下邸にありしを既に移し植しより十餘年を経るといへともその時のまゝにて更に成長せることなしといへりされハ此竹ハ大竹にハあらすして箬の類なることは明らかなり

竹譜詳録云白篛竹在處有之莖小於箸葉如掌大而長紫篛竹亦同但莖色黒紫耳

案和産紫篛竹その葉細小なるものハ風土のちからによれる所にして別種にハあらじ

釋名

玳瑁竹 種樹家称

案に此竹ハ莖たて紫黒色にして斑文絶てなし然るを玳瑁竹といへるハ蓋し種樹家の強名なるへし

紫篛竹 竹譜詳録

撫州府志云箬竹又名篛竹

黄金竹

黄金竹ハ漢名を金竹といふ此種江浙の間に生するものハその状淡竹の如く竹譜詳録琉球薩摩等に産するものハ苦竹に似て小なり丹州竹譜また安房よりいつるものハ高さ二丈許にして生竹の時ハさまて黄色にあらねといへとも乾きときハその色鮮黄爛なる真金の如し佐藤成裕説

又黄竹一名黄皮竹あるこれも金竹と同種なるへしとおもふ竹譜詳録に黄竹叢生與慈竹一類といひ晋安海物志に黄竹節紫色黄とみえたれと前條と同種にハあらさるへし

丹洲竹譜云、金竹似苦竹而小、其幹皆金黄色、琉地多有之
本草綱目啓蒙云、汴南圖史ニ金竹幹色純黄似金ト云、廣
東新語ニ有黄皮竹、凡竹非青則緑、此獨黄、古詩云林中枝
ヽ金瑯玕一丈二尺拂雲端謂此ト云、薩州ニ金竹アリ黄
ニシテ青色ナシ節長二尺許笛ニ作ルヘシ大竹モアリ
竹譜詳録云、金竹生江浙間、一如淡竹、高者不過一二丈、其
枝幹黄淨如真金、故金名、竺法真羅浮山疏曰、羅浮山有竹、
色如黄金
又云黄竹叢生与慈竹一類、但成竿即黄色、故名、越州蘭山
縣東三十里有黄竹山、上有林竹、色徽黄、状如刀削、志云是

范蠡遺鞭於此、山生筍為林、即此竹也、晋安海物志云黄竹
節紫而色黄、筍可為俎
本草綱目云黄者如金
蘇州府志云呉郡志金竹不甚大、色如金今不多見
江南通志云金色如蒸栗
江州府志云黄竹小而黄色一名男金竹其笋季斐方正
邵武府志云黄竹幹可以釣篾可以纜、其色黄
八閩通志云黄竹小而黄色
松溪縣志云黄竹節長肉薄、植之易成
靖江縣志云、黄竿色黄亦脩偉

詩

江南通志

詠金竹　　　蔣　堂

白鎰光寒一徑深潛疑造化鑄成林貪夫或有凭欄者、不見脩篁但見金

釋名

黄金竹 俗称

金竹 竹譜詳録、海南園史、蘇州府志、江南通志、

黄竹 竹譜詳録、晋安海物志、邵武府志、八閩通志

以上三名和漢同意なり下の黄皮黄竿の二名もまた

むかし梁に續竹譜に錫天子作詩三章以彦民謂之黄
竹之歌と見えたれハその竹ハ今いふ黄竹なるり金竹
あるの其実を知らねハいつれにても黄竹
ハ古名にて金竹ハ後世の名なれと古今の金竹をさ
して黄竹と云しも其名知られは古詩にいへる林
中枝に金粮竿とハいへるもまた其の名ハ八閩通志に斑
挑枝竹一日易金竹又名黄竹とハいへるハ同名異物な
り

黄皮竹 廣東新語

黄竿 靖江縣志

正誤

事物紺珠云金竹節有金色
案ずるに金竹ハ通雅皆金色のものにて節のミ金色のも
のにあらず異苑群注及び格致鏡原に金猫竹有金色
とミえたれバ節のミ金色のものハ即金猫竹なる事
明らけし されバ事物紺珠にいふところ金竹ハ蓋し金
猫竹の猫字の落しなり然るを庶物類纂金竹の條に
紺珠を引しハ脱文を知らざる誤なり

竹譜詳録云金竹生江浙間一如淡竹
案に竹譜詳録黄金間碧玉竹條に碧玉竹一與金竹同

とミえたれバ此文によれバ碧玉竹も金竹もその形状
一様のものなるハ著るし 又薩摩琉球及安房等に
産する金竹も今ある碧玉竹と同しく苦竹に似たる
ものなれバ竹譜詳録にいふところ浙江間に生するも
のもまたこれと同し形状なるべきを同書に金竹一如淡
竹とせるハ前後矛盾に似たれバこれハ其葉の淡竹
に似たるものハ蓋し風土の異なるによりての故な
るにやうたがはし

江州府志云黄竹一名界金竹
案に黄竹ハ通雅黄色のものなれバ其金竹の名ハ命

まつらしむると江州府志にその名を載せしハ黄
金碧玉竹もまた黄竹といへるにまぎれて誤れる也

金明竹　金竹

金明竹一名金竹一名筋竹一名きまだけハ漢名を黄金
間碧玉竹一名金鑲碧嵌竹一名黄金間碧一名斑挑枝竹
一名對青竹一名青黄竹一名越閃竹一名異金竹一名閃
竹一名黄竹一名間竹といふ今本所押上村の人家に一
叢林あり高さ凡一丈五六尺圍三二三寸其幹地上より
四五節を経て初めて双枝或ハ獨枝を生じ其枝左右細
大の異なる及び其節の隆起頗る苦竹と一様なりと雖

も枝を生ぜず節より以上ハ凹處皆青色にして枝を生
ぜざるかたハ黄色なりされども黄色なる中にもその
青なる凹所を少し離れて別に一行の深青細縱道あり
其細縱道二行相並ぶものハ青色やや薄し又下節の枝
なくして正圓なるところも青黄色を互にまじへること頗
る上幹の如しその幹を二つにきれバ内白肉ハ外面の
青黄にかかはらずすべて淡青色を帯て常竹のごとく
純白ならず其葉また苦竹に相似たれどもいづれも葉上
に細縱白道二三行雜出しすべて青色ならざるハ苦竹
と異なり此筍また苦竹に同しく五月の頃に生じその

篠青黄紅の數縦道ありて其形頗る刷絲の如くにして紫
斑点あることまゝ苦竹の如しその奇麗最竹幹よりも
勝れり味ハ大抵苦竹筍に相似て食ふへしまゝ幹葉共
に小にして毎節間三枝を生ずるものありその左右の
枝ハ大にして中枝ハ至て細小なりこれハ尋常の苦竹
のたまゝ三枝を生ずるものあるにあらずし別種にハあ
らじ又和漢三才図会に銀明竹一名紗地竹ありその筍
色白して溝緑色と見えたりこれハ金明竹の土地によ
りてその色を変せしものなるべし一種碧玉間黄金竹
ありこれハ竹身緑色にして節間の凹所一道黄色なる

ものなれど今甚稀なりまゝ一種竹身半バ青く半バ紫
にて二色相映ずるものを旧ハ對青竹といふよし僧賛
寧か筍譜に見えたれ本邦にハ絶て此種あることをき
かず

和漢三才図会云一種有金明竹、外黄溝中緑色
又云俗云銀明竹者筍色白惟溝中緑色美也、槁則緑変、一
如尋常竹

大和本草云黄金碧ハ竹譜ニ出タリ黄竹ニシテ青筋ア
リ雄竹ナリ大名竹ニ似テ不同京都北野ノ草木屋ニモ
アリ

本草一家言云黄金間碧玉竹、和名金竹、又名筋竹、其形状
出于五雜俎、雙槐歳抄呼為對青竹
増補地錦抄云金竹ふとき竹ハ枚なるあり竹の色黄なり幅三分程の青筋まきのことくに一筋つゝあり篁竹ともいふ也竹ともいふ
竹譜詳録云黄金間碧玉竹、一與金竹同、但枝節間凹所一道深緑、蛾産以是名者又異
又云碧玉間黄金竹亦同上、但竿色全緑、枝節間凹所、一道深黄
学圃雑疏云、金竹中美者曰黄金間碧玉、色澤殊栄、中界一道緑尤可愛、有一種大者、曰碧玉間黄金、稍不逼、然与黄金竹相對、庶一不可、余圃中俱不乏
遵生八牋云黄金間碧玉竹杭産、竹身金黄、毎節直嵌翠緑一條、不假人為、出自天巧也
又云碧玉間黄金竹杭産、竹身全緑、毎節直嵌金黄一條、又天成也
彙苑詳註云碧玉竹黄金間碧玉竹
湧幢小品云成都有竹、青黄相間、謂之黄金間碧玉
五雜俎云黄金間碧玉竹、其節一黄一碧、正直如界然
致富全書云黄金間碧玉、竿青黄色間節、或一節半青半黄

群芳譜云黄金間碧玉産成都、青黄相間
廣群芳譜云黄金間碧玉、成都古今記云、對青竹、竹黄而溝
青每節若間出、浙中亦有之、會稽甚多、彼人呼黄金間碧玉
業筍譜云竹則一边青一畔綠其色又与此小異
本草彙言云對青竹黄而莖青、成都所出、今兩浙亦有之惟
會稽頗多、呼為黄金間碧
茅亭客話云對青竹身黄色、有一脉青、節〻相對、故謂之對
青也
鼓山志云黄金嵌碧玉竹、生靈源洞
物理小識云、成都黄竹溝青

秘傳花鏡云金鑲碧嵌竹、産自成都、近日浙杭亦有与常竹
無異、但幹上每節兩青兩黄相間
福州府志云黄金間碧玉竹、一黄一青横竪相間、山中多有
之南湖産者濃艶
鎮江府志云閃竹即宋景文黄魯直所謂對青竹、宋賛曰翠
溝如畫黄賦云金碧其相、今以幹碧溝黄者、為碧玉間黄金、
幹黄溝青者為黄金間碧玉
南寧府志云青黄竹、通志青黄間碧玉
紹興府志云對青竹、惟会稽頗多、彼人呼為黄金間碧玉、今
或稱曰閃竹、又曰間竹、又曰戧閃竹、宋祁賛翠溝如畫、黄庭

堅賦金碧具相

瓊州府志云青黄竹、筠半青半黄

廣西通志云青黄竹俗云青黄間碧玉

嘉興縣志云黄金間碧玉、逐節青黄相間、亦不易得者

江陰縣志云金竹色黄故名俗曰黄金間碧玉

八閩通志云斑挑枝竹一曰易金竹、又曰黄金間碧玉竹

林務記云閩人呼其筍為黄筍、亦名黄竹

筍譜云對青竹、一边青一畔紫、二色相映可愛、筍繭可食、出成都、近孟昶據蜀作對青竹亭焉

華陽國志云、成都竹有名對青、半青半紫、二色相映可愛

事物紺珠云對青竹一辺青一畔紫二色相映俗呼黄金嵌碧玉

典籍便覧云對青竹半辺青半辺紫二色相映可愛出成都

因樹屋書影云成都有竹名對青半青半紫二色相映可愛見華陽国志余在泉州見此種甚多但細如拇指絶無巨者

釋名

金明竹 和漢三才図会 広物類纂

稲若水曰金明竹ハ武藏の方言なり

金竹 広物類纂 本草一家言 増補地錦抄

稲若水曰きんちくハ加賀の方言なり

志またけ 庶物類纂
稲若水曰志またけハ駿河の方言なり
ひよんちく 仝上
稲若水云豊前の方言なり
筋竹 本草一家言
案ニ金竹金明竹ハその色といひ筋竹ハ節間に青縦道のあるといふ
やう竹 增補地錦抄
案ニやう竹の名諸家本草に所見なし蓋し種樹家の名なるべし

黄金間碧玉竹 竹譜詳録 五雜俎 遵生八牋
金鑲碧嵌竹 秘傳花鏡
黄金間碧 本草彙言
案ニ黄金間碧ハ蓋し碧の下ニ玉字の落しなるべし
斑桃枝竹 八閩通志
畀金竹 仝上
黄竹 仝上
越閃竹 紹興府志
閃竹 仝上
間竹 仝上

對青竹 成都古今記、本草彙言

青黄竹 廣西通志、瓊州府志、南寧府志、

正誤

肇慶府志云碧玉間、莖黄如金、數縷青絲間之、故名碧玉間黄金、又云黄金間、皮色翠碧、數縷金絲間之、故名黄金間碧玉

案に黄金間碧玉竹ハ竹身黄にして溝青く碧玉黄金竹ハ竹身青くして溝黄なれバ上文に引所の諸書にて志るし然るをここに莖黄にして青絲の間あるを碧玉間黄金竹とし皮碧にして金絲の間あるを黄金

間碧玉竹とせるものハ誤れり且數縷金といふ時ハ恐くハ金絲竹の類をさすに似たり最疑ハし

増補地錦抄云金竹または篁竹といふ

案に篁竹即かなしろ竹の名なれバ篁字ハ蓋し筋字の誤なるべし

高麗竹 まだ竹

高麗竹一名蘇枋竹一名筋竹ハ漢名を金絲竹一名白絲竹一名刷絲竹一名七絃竹一名箭竹といふその幹節並に女竹に似て高さ三五尺大さ小指の如し毎節相去ること五寸許にて二枝五枝或ハ七枝を叢生すまた大枝

よりわかれし小枝にいたりては双枝なるもあれば獨枝
なるもありて其三枝なるに若竹にして五枝七枝なるは
老竹なりこれも女竹とおなしく年を経れば三枝五枝
の間に別に二節を生して其の枝を増し小枝の双枝獨
枝なるもまた二節三節を生して五枝三枝となるは本
幹と同し葉もまた女竹に似て細小にして四葉五葉七
葉等の不同あれどいつれも其葉莖に二葉三葉の枯落
し小蘀現に存すれば全形は即七葉一朶なりし扠此
竹若きの時は通幹艶紅色なること頗る蘇枋を以て物を
染しみこみしそれに五六七行の青綠路ありて宛も刷

縁の如く老る時はその紅色おのつから淡黄に変して
青色また薄し今種樹家往々之を培養するもの有れど其
奇麗最愛すへし往時此竹を薩摩より東都に奉り事あ
るよしきけれど今あるものは蓋し其遺種なるへしまた
西土にては撫州よりこの竹を裂し布とせしを貢せし
こと竹譜詳録に見え樸仔籬等社の土蕃にては此竹を
以て箭に作るよしは臺灣府志に見えたり
大和本草云一種スチ竹ト云竹アリ女竹ノ類ナリ白キ
タテ筋アリ大名竹ニ似テ同シカラス
葉に金絲竹の一名をまた白絲竹ともいへるまち竹

ハ即金絲竹の時ありて其色を変せしものなるへし

本草一家言云一種梔節似蘆、幹有綠路青黄紫相雜為縦

文名

この下缺文あり蓋金絲竹の三字なるへしまた筋竹

の二字またもありけんにや

本草觿云金絲竹、似大名竹、有小筋、出竹譜

竹譜詳録云金絲竹生湘潭間一名白絲竹、一名刷絲竹、本

箣竹之類以其易活人多植於盆檻中久々不瘁、竿上細黄

數道、如刷絲然、故名、志書撫州歳貢金絲竹布

八閩通志云金絲竹紋如金絲、故名

閩書南産志云金絲竹如絲

續修臺灣府志云金絲竹一名箭竹、大如小指、出樸仔籬等

社、土番以為箭

漳州府志云七絃竹色白帶微紅、中有青紋、大小相間、如琴

絃状

臺灣府志引臺海采風図云、七絃竹、幹白有青線紋五六七

條葉與□竹同

釋名

高麗竹 種樹家称

此竹ハもと琉球より薩摩に傳へしゆへ今ハ四方に廣

すゑしよしきれたる此高麗ハ即朝鮮なりまた唐なる
又二の類ありてあるかたに其地より来りしによりて
名付しにはあらじ

蘇枋竹 仝上

蘇枋ハ色によりて名つく

筋竹 大和本草

案に筋竹ハ金明竹と同名

金絲竹 竹譜詳録ハ閩通志 閩書南産志

白絲 竹譜詳録

剛絲竹 仝上

蔵

玉篇云刷拭也 三倉云刷掃也

七絃竹 漳州府志、臺灣府志

簕竹 續修臺灣府志

瑇瑁竹

瑇瑁竹ハ今駿河國藤川の傍なる木島郷にあり即ま竹の一種斑文ありて最長大なるものなり往時或人故ありて駿河國に至り始て此竹を見出しその上下を截去て長八尺餘圍三九寸許のものを携来りしを親見せりにその幹半體ハ黄色にして半體ハ節間皆大斑文ありてその状一様ならず或ハ一方にのみあるもあり所ありて

晩に生ずる胡瓜のまがりて最大なるものごとし或は左右
にくびれありて納腹壺の如く或は本小末大にして頗
團扇の状のごとく或はくびれなる所なくしてたゞ紫
黒色のみありてその斑文いづれも下の方は色こく上
の方はやゝ薄し凡斑竹は皇朝にても西土にても其品
偽造のもの多しといへども此竹の如きはおのづから
節ごとにその斑文のかく異なるは実に天下の奇竹な
るこゝろは年を経て乾枯せしたゞ一幹の形状のみを
あらはせりその生竹及び細小なる竹も極めて多しと
いへども其斑文の変化百出これも異なるものも亦あふ

かゝるへしまた或人のその地に至りしとき土人この幹を
擘て簇となし蛇籠を作りて藤川に沈て洪水を遮きりし
しといへりかゝる奇竹を以て尋常の用に供せしもの
ハ最おしむへし抑此瑇瑁竹ハ旧より駿河國にのみ産
してその他諸國にハこれある事なきを以て諸家本草
総てこの竹を載せす往時或人其地に至りて携へ来り
しを初とす故に世人嘗てこの種を知るものなし又竹
譜筍譜及ひ本草綱目等にもいまた此竹を載せされハ
見れハ西土にハかくの如き瑇瑁竹ハあらさりし彼に
いはゆる瑇瑁竹ハ弓竹にて毎節斜めに曲りて長さ十

譜文にして斑文あるものをわけてこれをもて総て別種なりとす昭代叢書に載る所の陳定九が竹譜に瑇瑁竹産廣西、幹色如瑇瑁明亮直透花内といへるハこれと全く同種なるに近きにや尚考ふべし

釋名

瑇瑁竹 駿河方言

此竹斑文極めて大なれバいつとなくその状瑇瑁斑に彷彿たれバ故に名づく

玳瑁竹 陳氏竹譜

玉篇云瑇、徒戴切、瑇瑁或作玳瑁、莫到切、珪、長四寸天子

執之又莫對切瑇瑁也本草綱目云玳瑁音代昧又昔毒目時珍曰其功解毒々物之所娼嫉者故名

漢竹

漢竹ハ和漢通名なれバ江村如圭ハ漢竹伊豫に生じ以て笛に作るといへり本草鵠いひ石川士清ハ漢竹桶となさんきものの豊後より出るといへり和訓栞いつもまた相模の金子村に産するもこれと同種なりといふ此種ハ蓋しこの竹の其土地に應じてよく生育し其幹極めて長大にして圍三二尺餘に至るものにて別種にハあらざらんまた竹譜詳録に龍葱竹生羅浮山、因名羅浮竹々

皆十圍といへるも大暑此類なりけしとおもひしに蘢
葱竹ハ恵陽志ニ葉如芭蕉大長及一丈といひ番禺志に
蘢葱竹葉大如手径二三尺といふ時ハ之とハ絶て別種
なり 叔佐藤成裕壮年の比遊歴せし時肥後の小國と云
所より二里許山間の人家なき所をすぎて豊後の肥田
といふ所に行しにその間に竹村ありその名ハ忘れた
りしもいつて其所ハいと高き土山にして其山頭に大
竹数万幹群り生して水田ハなく只畠のミ少しハあり
といへども畠にも其の比ハおのづから筍を生し
てぬきとらざれバ忽ちに竹藪となりかく竹の多き所

故に土人の家居ハ皆竹を以て作れり床ハさらなり柱
も障子も薪までも皆竹を用うるなりそこの男女ハ終
日竹のことにのミかゝりて別に農業を勤むることも
なしこれも古よりの竹村なれバ三度の飯も竹筍の乾
したるを糧とし小児の時より疱瘡も至てかろくして
壮健なること世にたぐひなし又別に悪病も煩ふことな
けれバ医を頼むこともなしとぞそれとのミ土人ハ是
こそ第一の物語しけるまゝ筍を製するかハ柔き比取て
湯に浸し或ハむしなどして日に乾かし用る時に水に
浸し煮て食するに其味殊によろし凡半里餘も左右皆

竹林にして其道傍に材木を積たるもの如く竹を切て積
置或ハ輪竹にして近国へ出しまた屋の用に供を見て
かくの如き竹の夥しくある所ハ世に又とあるまじき
なるを其の家居のさまハ皆人々の巧ミにまかせて面
白く作りしものなれバ中々に言語に述がたしとい
へり和訓栞に漢竹豊後より出るといへるハ蓋しこの
村のことなるにや

本朝俗諺志云相州西郡の内金子村（さかわより二里半）に金子帯
左衛門といふ百姓あり此藪の竹一尺八寸回り六七間
の末まで一尺廻り程あり藪ハ甚しく十間に二十間許

一間に一本つゝある珍らしき竹藪なり此竹ハ所望を
れを最初の契約にて根からハさらに三尺をのこし工よ
り切て切口に何か薬をぬりて竹の皮にて裁直し包ミ大
切にするなり

廣志云永昌有漢竹圍三尺餘、大者一節受一斛、小者數升
爲樽榼

筍譜云漢竹筍大者一節受一斛、小者受數斗、可爲樽榼、其
筍一節可受二三升、味雖苦而滑

竹譜詳錄云漢竹出交趾九真、廣中亦有之、大者一節受一
斛、小者受數斗、可爲樽榼、其筍一節亦可受二三升、味苦而

溢

本草綱目云永昌漢竹可為桶斛

雲南通志云漢竹即南中志所謂節相去一丈可受一斛者

今産不過去二三尺受升合而已

釋名

漢竹 廣志、竹譜詳録

案るに漢竹名義詳ならす廣群芳譜引華陽國志云簢竹出永昌郡云々筍譜本草作漢竹疑簢字之誤なりといへり誤れるへしさりなから今傳ふ筍譜にハ漢竹の外に簢筍ありて出温所建寧竹如苦竹長節而薄可作屋椽

筍則春生可食と見えまた竹譜詳録本草等にも漢竹簢竹を以て各條に出し但二竹の生所おのく異なるよしなれハ蓋し一物にハあらさるへし

一種またけ

一種のまたけハ竹譜詳録に載るところ廣西山中のものと同種なり予園中嘗て巣鴨の種樹家より移し植るものその高さ八九尺その葉尋常のまたけと同しく三四葉或ハ五六葉を以て一朶となれともその状甚タ細小なるを異なりとす又新竹の梢葉にいたりてハ九葉或ハ十葉または或ハ十一葉を以て一朶となるハ頗る

方竹の嫩苗葉の如し此竹中幹より以上ハ毎節双枝の間別に小細枝を生じてすべて三枝あることゝ其節の状及葉本に細褐毛あるハ尋常のまたけにおなじ又白河侯大塚の下邸に猪名野篠原の竹ありて即またけの一種三枝なりとのみにて亭園中のものと同種なり或ハ尋常のまたけの叢林中にて其幹細小なるものハたまく三枝を生じてこれと一様なるものあれどそれハ全く変生にして一種のものにハあらざるなり

竹譜詳録云苦竹處々有之、廣西山中一種散生、毎節間生三枝、葉長如筆竹、色深緑瑩淨婆娑極可人意、筍味苦、病積

熱者食之甚良或云可生長

おきな竹

翁竹一名並目竹ハ漢名を間道竹といふ其幹節並ニ苦竹ニ竹ニ似て高一丈餘圍三四五寸ニ至る此竹始め獨枝ニして後ニ双枝のもの多しその双枝なるハ必ゑ左右互ニ大小の異なることあり外苦竹の如し葉ハ大抵短竹ニ似て五葉と一系ともまた三葉のもの四葉なるものあるハ年を經て二葉或ハ一葉のかのれと枯れおちしまてもの全形ニハあらん其葉表裏ニ透りて淡黄白の縦道三五行青葉中ニ間して兒篠の如く葉本より葉先

に至るまて梢葉に至りてハ却て青色にして縦道なき
なり 此即西土にいふところ 間道竹なるものなりといへる邦産
なく 幹ハ竹のごとく無叢或ハ十四五葉に至らざるを
異なりとす 今白河侯大塚の下邸に金目竹といふものあ
り即これと同種なり 又一種その葉大なれとも苦竹と一
様にして 毎青葉のうちたまたま左枝に一葉或ハ右枝に
一葉その葉の正中或ハなかばよりして一行二行の間道あ
るものあり これハ全く苦竹の変生なり
増補地錦抄云翁竹ハ葉の色白く青筋ありて しまの如
く遠く見取して たすの如くなれ 雪ふる竹と見る如くなり

なんてよろきやうに名あるなき里

竹譜詳録云間道竹生兩浙山中、人家庭院亦有植之者、竿如水竹、節差密、葉如毛頭竹頗瘦長、葉上有淡黄間緑細勒道五七行、毎叢或至十四五葉、呉興周公謹窓有別業在杭

一叢數本

釋名

翁竹 増補地錦抄

名義上文にみえたり

圭目竹 種樹家称

圭目ハ、よこ木の條理あるをいふ、此葉間道木の條理

あるのごとし故に名つく

間道竹　竹譜詳録

孟宗竹　ませたけ

孟宗竹一名唐孟竹一名ませたけハ漢名を狸頭竹一名
猫弾竹一名猫児竹といふその高さ二丈餘圍三八九寸
にして毎節間はちくよりも麁し其節の状上段至て低く
下辺ハ稍高しこれを細査されバもと全く下辺のみにて
上段なきが如し凡諸竹ハ半體以下その太さ毎節大概
おなしかれども孟宗竹ハ極上第一二節よりして第三
四節ハ少しく細く第三四節よりいまく第五六節ハ稍

細し毎節漸こに如此して稍上に至る故に下麁にして
上細なるハ即此竹の性なりその根上より六七節の間
ハ節殊に密にしてまるて節下ハ粉白なることはちく
のごとしその大なるものハ即十七八節以上よりして
枝を生ず小なるものハそれに準へて定るこれも始
の一節ハ独枝にして後に双枝なるもあれども始一節ハ
双枝にして後に独枝を生しそれより以上ハまた双枝
なるもあり葉ハ全くはちくの葉に似てはちくよりも
極めて繁く毎枝皆三葉にして時に二葉なるも交へれ
ど凡はちくま竹の類の大なるものハ節低くして小な

なるものハ殊ニ節高しといへども孟宗竹ハ細大の別な
くすべて本幹節ハ毎節低くして枝節ハ却て鶴膝状を
なして太ちくの枝節よりもすら高くして常竹と異な
るハこの竹の性なれ　故孟宗竹ハ旧より皇朝ニなかりし
しものニて正徳の頃西土の種を始めて琉球より傳へ
しを薩摩ニ移し植しが今ハ四方ニ廣まりしよし　國史
草木昆虫攷ニ見えたり　さればこれより以上ハ寒竹及
ひ鳳尾竹なるもの冬月筍を生ずるものを以て孟宗竹と
ハ名付しせし之即此竹の旧よりあらざる確証なり
中山傳信録産物考云、孟宗竹和名ワセタケ梅具竿高文

餘其葉狹小而下垂甚可愛、穀雨之節出筍、籜皮厚有毛
續西遊記云薩隅の辺ニ唐孟宗竹といふ竹あり人家ニ
多し常の竹よりハ薄く節低く葭ニ似たり然れ共甚太
くして大なるものハ二尺回り以上ニ至る花生ニ用ゆ
て甚見事なり此竹元来唐土より来れりといふ薩州ニ
て唐孟宗といふなり
本草綱目啓蒙云カンチク一名孟宗竹云々今別ニ大竹
ニ孟宗竹ト呼フアリ琉産ナレ𪜈今ハ京師ニテモ繁殖
シ囲三尺餘ニシテ花尊ニ作ルヘキモノアリ
国史草木昆虫攷云孟宗竹正徳中ニ中山人これを薩摩

又致したり今ハ則ち四方ニ盛茂す
竹譜詳録云狸頭竹一名貓彈竹處々有之江淮之間生者
高一二丈徑五六寸衡湘之間者徑二尺許其節下極密上
漸稀枝葉繁細笋充庖饌絶佳此笋出時若近地堅硬或礙
磚石則無間遠近但遇可出處即穿土而出猶狸首鑽穴無
不通透也故寫此名亦有高止一丈許者下半特無枝葉人
家庭院栽植枝葉扶疎清陰滿地殊可愛玩然竹身下麁上細
竿大葉不宜圖畫廣中出者笋味不佳江西及衡湘間人入
冬視其下地縫裂處掘食之謂之冬笋甚美留不取至春亦腐
朽別生春笋名竹福州人謂名麻頭竹

續竹譜云猫兒竹長沙有之、下豊上細其筍甘美、大者皇千餘竹

漳州府志引華夷考云、猫兒竹、大者徑七八寸、高而堅実、笋生冬春之交

釋名

孟宗竹 中山傳信錄 産物考 本草綱目啓蒙

此竹冬月筍を生するを以て呉の孟宗の故事によりて其の名付しなるべしされども孟宗の母に供せしハ竹譜詳録に雪竹筍なるといひ或ハ江南竹笋の早く出るものなりといへどもいまだその実を知らず又物産考

又孟宗竹和名ワセダケといふ文によれば時ハ孟宗竹
ハ蓋し琉球名なりとも知るへからす

唐孟宗竹　蕃西遊記

まち竹　中山傳信録　産物考

狸頭竹　竹譜詳録

右義上文に見えたり

貓彈竹　仝上

麻頭竹　仝上

福州の方言なりといへり

猫兒竹　續竹譜　漳州府志

正誤

本草綱目啓蒙云江南竹和名孟宗竹云々

案に此説ハ閩通志に江南竹麁大而堅直筍冬生といへる文によりて孟宗竹を充てしものなれども竹譜詳録に江南竹一面出三枝といひ通雅に江南竹葉肥幹薄不可為篾葉大可裹糭文莲者也といへる孟宗竹ハ江南竹にハ充らざるなり

國史草木昆虫攷云孟宗竹ハ羣芳譜詳注に貓竹大者徑七八寸高而堅実筍生於冬曰冬筍不出土而味佳といへるものなり群芳譜に茅竹又作毛竹、皆一聲之轉也　云々

案ずるに八閩通志に云 猫竹方言謂之麻竹、大者径七八寸、土人或取其葉以裹角黍筍复生まて閩書南産志云猫竹方言謂之麻、可以椽、可以器、削之可以刀、其葉月可以裹角黍と云ふなり凡角黍を裹ふに孟宗竹の如き細小なる葉ならハ包むへからされハ猫竹ハ即孟宗竹に非さまて 諸暨縣志云毛竹或作猫、又作茅、致富全書云毛竹遍身毛刺、其堅厚需用最多、其葉大即青箬、取作笠及舟蓋、諸用筍冬初即生、名潭筍、味最鮮といへり これによれハ毛竹或ハ猫竹ハ作るものとまて孟宗竹とハあらさるなり 秘傳花鏡云、猫竹一作毛竹、浙

閩最多、幹大而厚、葉細而小、異於他竹、人取編牌作舟、或造屋皆可、常熟縣志云、幹巨而葉細者爲貓竹、安慶府志云猫竹大而堅厚、適用、筍可食、竹不生處、埋死猫一頭、明年筍即生、故曰猫竹、江南新城縣志云猫竹筍似猫頭、故名、竹最長大なるにより孟宗竹に近きやうなれ共廣群芳譜に猫児竹長沙有之、下豊上細、其筍甚甘美、大者圍十餘寸、案毛竹一名猫竹與之各別と見えたれハ猫竹ハ孟宗竹にハあらさるなり

布袋竹 琉球竹

布袋竹一名琉球竹一名虎攅竹ハ漢名を多般竹といふ

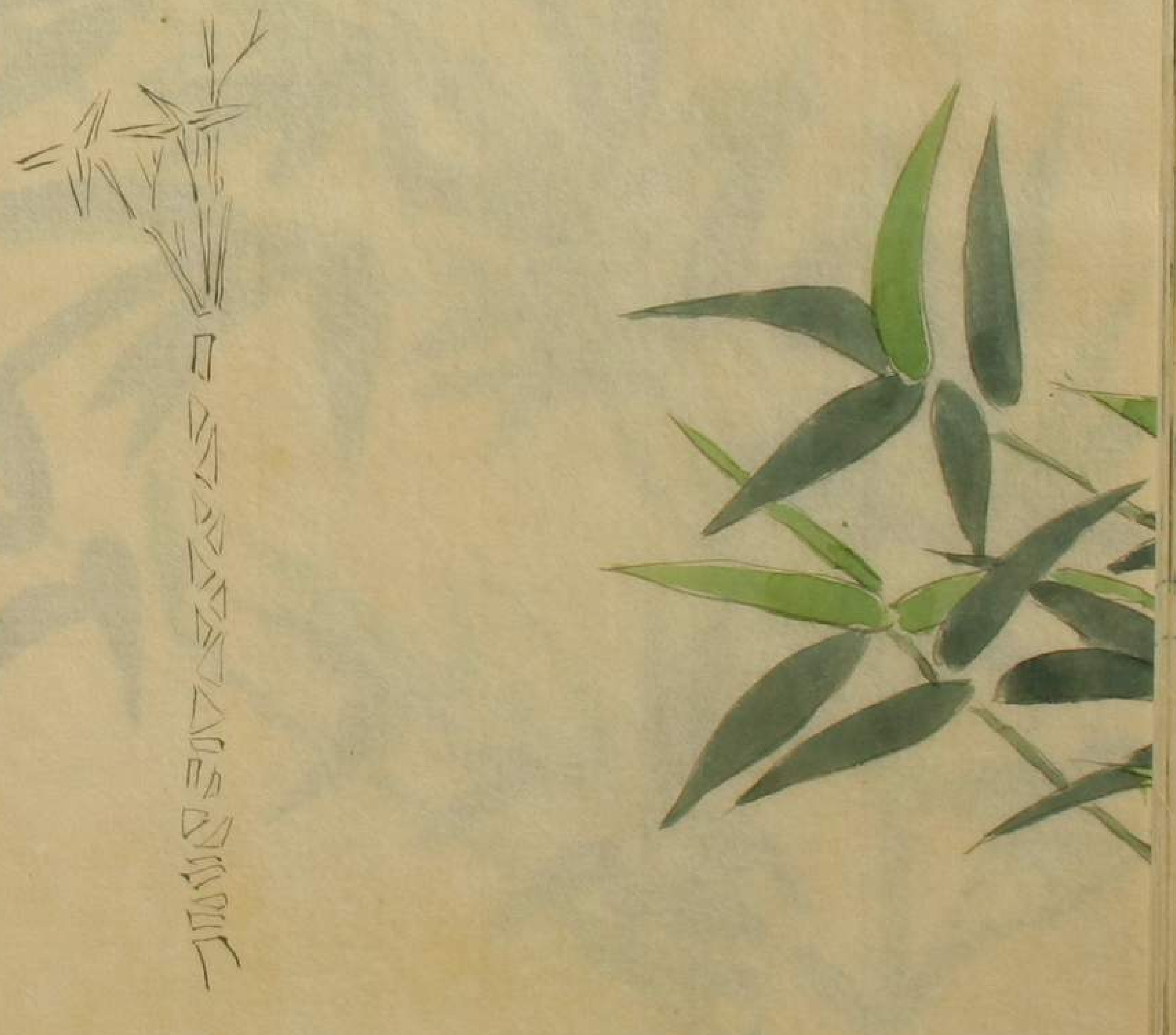
此竹根上より二三節以上ハ其節密なること凡五六節或ハ八九節其最密なるハ十一二節に至るその節或ハ斜或ハ正にして毎節擁腫充も人面のごとく或ハ鶴膝の如く或ハ蟾蜍の如く或ハ縮頭の鼈の如くさまざまなり以上ハ節跡まで節の状真竹に似て上高く下低し元密節上より末に至てハ其節下に擁腫なきハこの竹の常なれども稀にハ擁腫あるもあり葉ハはちくに似てやゝ長大にして繁しその先二葉相對し一葉ハ其下に付てすべて三葉を一叢とす始の枝ハその擁腫をなす密節上よりも生し或ハ密節中及密節下よりも

生するもあり又始の枝独枝なるもあれどその節に黄牙を帯ぶるもあり其枝を生ずるときハ竹身互に凹所あるゆゑにいつとても其正中少しく高く起りて其凹所全く両道なり此竹高さ八九尺より一丈許に至る邦人筑前此竹を杖とすその質至て軽くして雅趣ある実に扶老の材なり此筍状小なれどもいつとても味ひ衆筍に勝れたりされバ人多くこれを喫ふ事をしらず又俗に武田竹とよぶものあり是れハ武田信玄存生の時手つから杖を土にさし置しが根付しものにて今に其竹を節の所より切れば花菱の紋あらはるゝに似たりといひ傳ふ

此竹の産する所ハ甲斐國府中の傍なる信玄居城の跡
なるよし今白河侯の大塚の下邸にその種を移し植ら
れしを親見するに全く今の布袋竹なるを別種にハあら
ぬ

大和本草云琉球竹又コサン竹ト云琉球より来レリ大
ナルハ杖鞭の如シ形状其葉ハ呉竹ノ如シ節間或ハ遠
ク或ハ近シ近キモノハ五六分遠キモノハ五六寸一本
ノ内ニテ遠近アル事如此、筑紫ニコレアリ和漢三才図
会云案出於日向佐渡原有名虎攅竹者、高五六尺其葉小、
自根上一尺許間、有節七八數、磥砢甚奇也、即節竹良、根梢

瘦細性不勁、所謂暴節竹乎
本草一家言云鶴膝竹、其根上寸節許、促々臃脹、凸起如人
面漢名布袋竹、又名古散竹、漢有虎散竹、與之不同
本草綱目啓蒙云ホテイチクハ本邦ニテハ秋トス元琉
球産ナル故大和本草ニハ琉球竹トイフ、マタ、コサンチク
トモ云漢名人面竹本草彙言ト云ヘリ
竹譜詳録云多般竹亦人面竹之類、去土一二節之上、生節
長斜正不等、或如人面、或如鶴膝或如鱗甲或如蟕蠵、或如
猪頭之鷩、或如藏六之龜、五六寸節後方如常竹、故名末陽
金華山中尤多



釋名

布袋竹 本草一家言、本草綱目啓蒙

此竹節間圓起突出頗る画にみゆる布袋和尚の面の
ごとくまた其腹の如くなるゆゑによりて名づく

琉球竹 大和本草

此竹元琉球より来る故にこの名あり

虎攅竹 和漢三才図会、大和ム 本草綱目啓蒙

案ずに三才圖會に虎攅竹ハ俗称なりといへども其名
義に至りてハいまだ本草一家言に古散竹に作り廣
大和本草にハ五三竹に作る此竹の節或ハ三或ハ五

相連なるよりての名なりとし又古散竹ハこれと
別物なれどもただ通音よりてその名を假借せしのみと
又或ハコサンを鼓山よりて閩中の地名なりとしるも
ならん

多般竹 竹譜詳録

此竹毎節極めて多般故に名づく

正誤

和漢三才図會云虎攅竹是暴節竹乎
案に暴節竹ハ俗にこぶ竹といふ即節竹にして皇朝
にいふて たふきだけのたぐひ

本草一家言云鶴膝竹一名佛面竹一名雞腿竹俗名布袋竹

案ずるに鶴膝竹と佛面竹とハ素両種にして布袋竹とも異なれり然るを今三種混同して一ツとなせるものハ誤まれり又雞腿竹の名ハ廣羣芳譜に見えたれど是も鶴膝竹の一名にして布袋竹にハあらじ

本草綱目啓蒙云ホテイ竹ハ漢名人面竹ト（本草蒙言）云ヘリ

案ずるに人面竹ハ通雅にいふ佛面竹の小なるものなれバ布袋竹とハ別種なれバ其状布袋竹ハ毎節擁腫まることと人面の如く或ハ鶴膝の如くにして人面竹ハ両節の間突起することと人面の如くまた佛面の如きものなれバ元より一種にハあらざるなり

佛面竹 佛肚竹

佛面竹ハ和漢通名にて一名を人面竹一名を鬼面竹一名を佛肚竹一名を佛眼竹といひまた俗名を拉母七孤（ラムチク）といふ下野國芳橋辺の竹林（丹州図竹）及伊豫國吉田領大乗寺境内にあるもの（国史草木昆虫攷）にいへるその状大小のたがひあるといへどもすべて地上一二節或ハ三四節より左右邪正両節相對して大亀甲文の如く中間高く起りて頗る人面のごとくまた佛肚のごとし方干魯か墨譜に

毎節間二句一聯の七佛偈を鐫成せしハ即此竹にて西土にも至て稀なるを丹洲図竹いへるハ今案に二の種西土にも大小のたぐひありて其大なるハ即ち華厳寺の什物とせしを丹洲図竹に載せしものにて其産地いまだ詳ならざれバいつれにも竹譜詳録に天竺國に産するものハ形似て尤奇と見えたれど若しくハ天竺より傳来せしものにてもあるべきか又小なるものハ西浙江廣に出るを竹譜詳録にいひまた高要縣にハ所在多くこれあるを高要縣志にいへる此種ハ尋常の人面竹にして方氏墨譜所謂佛面竹もまたこれと一物なるべし

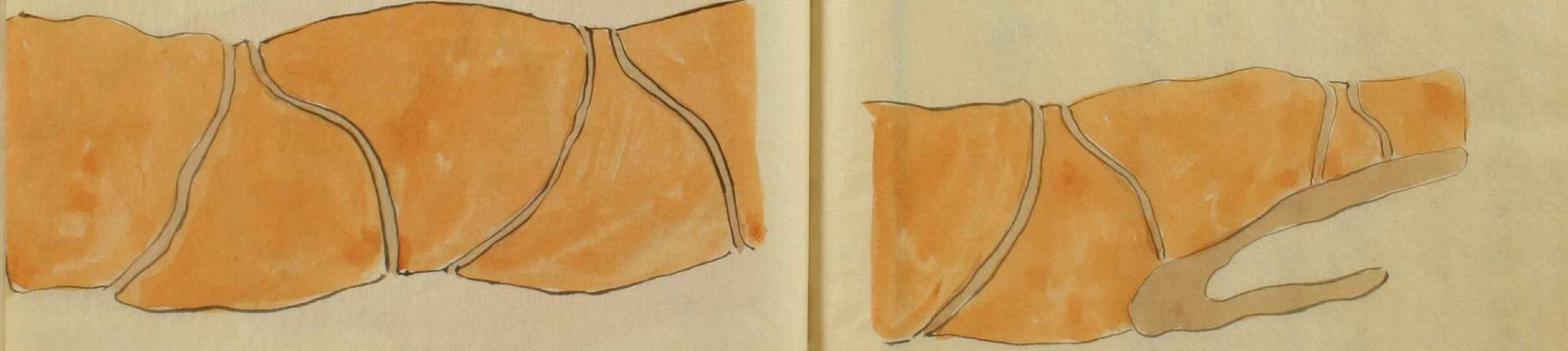
丹洲図竹云佛面竹大サ長サ図ノ如シ古色光澤愛スヘシ正面ヨリコレヲ見レハ大亀ノ甲紋ニ似タリコヽニ図スルハ側面ヨリ一着セル所也方氏墨譜ニ佛面竹アリ其状此図ト一般ナリ大サ一握許ニシテ節間盡ク二句一聯ノ七佛偈ヲ書シ鐫成セルモノナリ唐山ニモ稀ニシテ得ヘカラサルモノトシ貴重スト見エタリ本邦下野州芽橋ト云所ノ竹林ニ此状の竹アレ氏小ニシテ見ルニ耐スト云

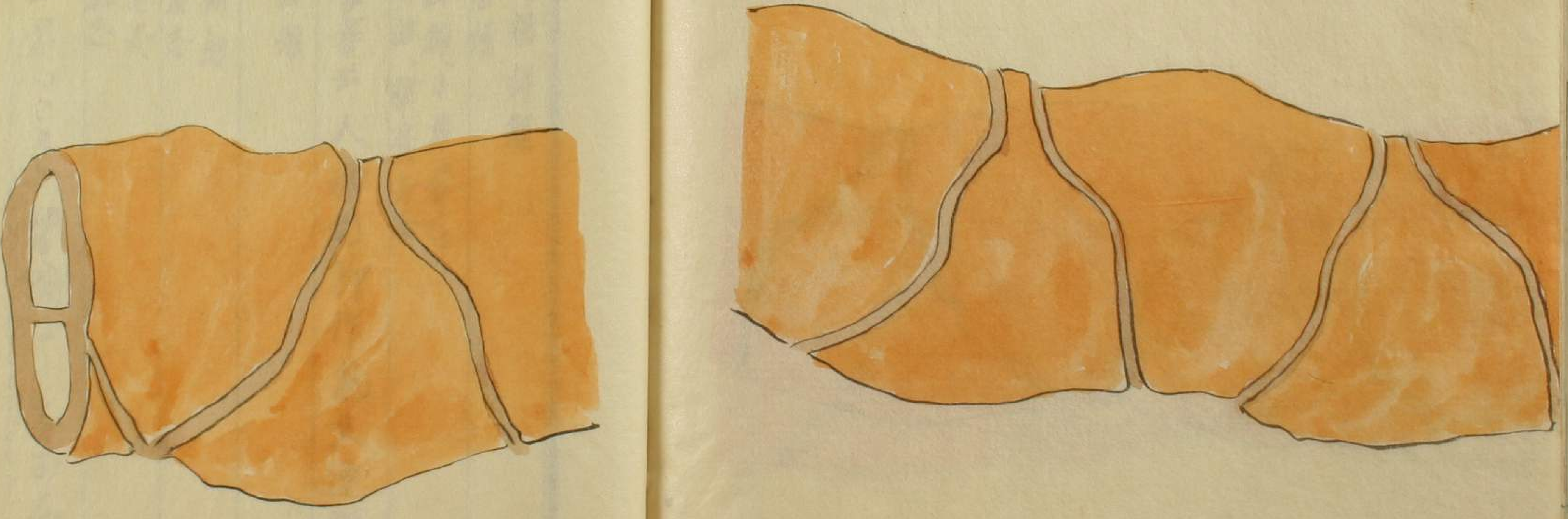
國史昆虫草木攷云方于魯ノ墨譜及李息齋竹譜ニ図載せし佛面竹ハ奇の奇なるものなるにこれ蓋竹譜の人面

竹の屬なり伊豫國吉田領大乗寺境内ニ生ずるところ其
國人其図をめぐらして予に贈るに即佛面竹也
通雅云華嚴寺佛面竹筒即人面竹之大者僧修其名遂信
之邪
竹譜詳録云人面竹又名鬼面竹又名仏面竹両浙江廣俱
有之去地工一二節皆左右邪正両節相對中間突起長四
宛然如人面或多至十數節之上皆平正如常竹筍亦可食
人多採以為拄杖福建人呼為佛眼竹東坡送與羅浮長者
即此竹也或云天竺所産者形似而奇
肇慶府志云佛肚竹出陽江封川俗人面竹節小而中大堪

作杖
天台山方外志云佛面竹北山間有佳者可作杖不堪他用
故植之者寡
廣東新語云人面竹節小而中大小處如人面大處如腹亦
曰佛肚竹
髙要縣志云佛肚竹今所在多有之俗呼人面竹節小竿中
大差堪作杖
桂海虞衡志云人面竹節密而凸宛如人面人家之為拄杖
五雜俎云有人面竹其節數一蹙一御如畫人面然
農政全書云人面竹出剡山節極促四面参差竹皮如魚鱗

面凹頗如人面
海澄縣志云人面竹、節密而凹宛如人面故名
淳祐志名佛眼竹
諸羅縣志云人面竹高四五寸、通志一名佛眼竹、可供玩賞
紹興府志云人面竹剡山有之、竹徑幾寸近本逮二尺節極
促四面参差、竹皮如魚鱗而凹、頗類人面
八閩通志云人面竹、其幹与常竹無異、惟兩節間、突起如人
面可以為杖
又云人面竹、亦曰佛眼竹
釋名





佛面竹 通雅 竹譜詳籙 方氏墨譜

人面竹 竹譜詳籙、本草夢言 廣東新語、肇慶府志

宋長石飲食書云人面竹節作亀文遠視似眉目

亀面竹 竹譜詳籙

佛肚竹 廣東新語 肇慶府志

佛眼竹 八閩通志 海澄縣志

葉子以上五名ハことに譬喩にしてあなかちに眼目口鼻の状を具せしにハあらされ共なけて之をいふ時ハ大なるものを佛面竹或ハ佛肚竹といひ小なるものを人面竹或ハ佛眼竹といふ又或ハ佛眼竹ハ益

し節間ふして凹凸ありて頗る眼目の状あるによりて
て名付しまてある魚網にや

拉母七狐（ラムチク） 庶物類纂

近江及び和泉州の方言なりといふ

桂園竹譜巻之三終